

平成28年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT28079 プログラム名 本を残す 本を伝える～書籍の保存と修復～



開催日：平成28年9月19日(月・祝)

実施機関：一橋大学

(実施場所) (社会科学古典資料センター)

実施代表者：福島 知己

(所属・職名) (社会科学古典資料センター・助手)

受講生：中学生6名・高校生4名

関連URL：<http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/education/hirameki.html>

【実施内容】

◆受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

本プログラムは、昨年度まで山崎耕一特任教授(肩書は当時)を実施代表者として同じタイトルで行われたプログラムを引き継いで企画されたものである。実施代表者の福島は、昨年度までのプログラムでも実施分担者を務め、もともなった科学研究費採択課題「西洋社会科学古典資料の書誌学的調査に基づく印刷地推定法に関する実証的研究」(課題番号 23330066)にも研究分担者として参画した。「西洋社会科学文献の奥深さや書物の修復・保存の重要性を伝える」という従来の企画目的を継承しつつ、新たな視点を加えることによって、さらにわかりやすく有益なものにすることを目指した。とりわけ本年度は、「羊皮紙」というテーマを設定し、ふだん見慣れているパルプ紙とは違う素材に触れてもらうことで、本の世界を新たな視点で見ってもらうきっかけにもらった。



これが羊皮紙(裁断前)だ

1. 実物による体験の重視

①本に囲まれた環境を体感できるよう、図書室(社会科学古典資料センター)を主会場とした。普段は立ち入れない貴重書庫内で西洋社会科学古典書籍等の紹介を行うことで、大学の専門図書館のアカデミックな雰囲気を感じてもらおうと共に、保存環境維持のためどのような配慮をしているかを実際に見学できるようにした。

②羊皮紙について知ってもらうため、裁断前の羊皮紙実物を見てもらったり、実際に触ってもらうなど、感覚的な水準で味わってもらうことを目指した。

③社会科学古典資料センターに附設されている保存修復工房で実演および実習を行うことにより、資料保存の理念と実際を実地に体験できるようにした。実演および実習指導には、普段から保存活動に携わっている工房職員に活躍してもらった。



日本語では一律に「羊皮紙」と言い習わされているが、実際には山羊皮やひつじ皮など様々な素材から作られており、色味や質感も異なる。上は山羊皮、下はひつじ皮。

- ④隣接する一橋大学附属図書館の貴重書室で和書貴重書を見学する時間も設け、資料の保存と利用という目的を達成するために二つの機関がどのような方法を採用しているかを説明し、両者を実地に比較させた。
- ⑤附属図書館内のもっと最近の本が収蔵されている書庫にも入室し、自由に見学させて、貴重書書庫との比較を行ってもらった。

2. 資料や教材を充実させた

①予習だけではなく後日の復習にも役立つよう、B4大24ページのパンフレットを作成し、事前に送付した。パンフレットには、紙のなりたちや歴史的製本の方法、羊皮紙とその作り方についての説明、一橋大学社会科学古典資料センターが所蔵するホブズ『リヴァイアサン』や『マグナ・カルタ』についての解説、実習でおこなう紙の修理、製本、保存容器の作成方法の図解、保存や製本に関する本やウェブサイトの紹介などを掲載した。

②実習で作成したノートと保存容器をそのままお持ち帰りいただいた。ノートと保存容器の作り方をパンフレットで詳しく解説した。ノートの表紙はマール紙と羊皮紙で作成した。

③修了証を、資料保存用に用いられる特殊な中性紙で作成し、持ち帰ってもらった。



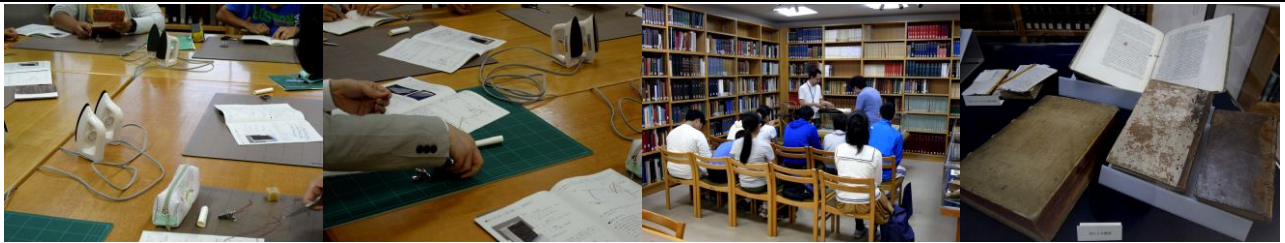
実習で作成してもらったノート。羊皮紙とマール紙から表紙が作られている。

◆当日のスケジュール

9:00受付開始(社会科学古典資料センター集合)——9:30開講式(センター長のあいさつ)——9:40オリエンテーション(科研費の解説、当日の概要説明)——10:00講義(展示資料説明)——10:10講義(センター書庫見学、資料紹介)——10:50休憩・移動——11:00附属図書館貴重書室(和書)見学——11:30附属図書館探検——12:00昼食——13:00講義(修復工房の見学、道具の説明)と実習(ページ修理と簡易製本、保存箱の作成)(途中10分休憩×2)——16:00修了式(アンケート記入、ブックマイスター号授与)——16:10解散

◆実施の様子





◆事務局との協力体制

日本学術振興会との折衝、会計管理、学内の事務手続き等を学内のそれぞれの部署で行ってもらった。学術・図書部の課長代理(総務担当)を中心に事前の広報活動への支援を受けた。

◆広報活動

社会科学古典資料センターのサイトに募集案内を掲載して周知を図るなど、積極的な広報を行った。結果として過去最高数の 96 名の応募を頂いた。

◆安全配慮

学外者であっても学内の事故については大学で加入している保険でカバーされるため、別段の保険はかけなかった。事故防止のため、実施代表者、分担者が全体を通じて気を配ると共に、実習中は実施協力者を含めて受講者 1.2 人に対してほぼ 1 人の割合で見守り、十分に指導した。

◆今後の発展性、課題

大学図書館による古典籍の収集は原典にもとづく研究という学問的理由に基づいている。とりわけ一橋大学で収集しているのは社会科学関連の資料であり、当該分野についての専門的知識が求められる。しかし、収集された資料の保存は、紙の劣化のメカニズムや食害をもたらす昆虫やカビについての知識など化学や生物学などを含む自然科学的な広範な視点を必要としている。資料の活用と保存にとって必要なのは、理系や文系といった単純な切り分けでは太刀打ちできないような、広い視野に立った知的目配りといえる。

その一方で、保存活動において必要なのは — また、あらゆることにおいて究極的に必要なのは — 、単なる知識にとどまらない一種の“手仕事の感覚”とも呼ぶべきものである。今日われわれは機械に囲まれた環境にいるが、どんな複雑な機械でも、その基礎のところには手仕事の感覚のようなものが出発点としてあり、その感覚は、獲得された知識にもとづいて実践がなされていく際の祖型をなしている。

本プログラムの主題は、大学図書館における資料の活用と保存の実際であり、また、以上に述べたような、あらゆる学問の基礎にあるような知的好奇心の核となりうるものであった。その意味で、附属図書館書庫で受講者たちに自由に見学させたときの様子は大変印象的であった。ある者は数十年前の新聞縮刷版を熱心に読みふけり、ある者は洋書の背表紙を順番に眺め、ある者は図書の管理方法について熱心に質問してきたのだ。短時間ではあったが、受講生たちの関心の一端を知るよすがとなった。今後も受講生たちの興味を喚起できるようさらに工夫を凝らしていきたいと考えている。

【実施分担者】

山部 俊文	社会科学古典資料センター・センター長／大学院法学研究科・教授
夏目 琢史	附属図書館・助教
床井 啓太郎	社会科学古典資料センター・助手

【実施協力者】 4 名

【事務担当者】

小松 孝彰 総務部 研究・社会連携課 社会連携係・係長